

「神様の愛の中に生きる」

～過去から今に生きる～

イザ 65:1～2 16～18

あるラビ（ユダヤ教の指導者）が床屋に髪を洗いにきました。ラビは床屋の主人に指導者として語ります。「あなたの罪が赦されているのか神様に祈り確かめなさい。」すると、床屋の主人が答えました「祈っていますけど私の罪は赦されるというほどの大した罪ではありません。まあ、でも赦されていますし、同じ様に私も神様のことを赦しています。」驚くラビに主人は続けて言います。「神は私が願ったものとは全く違うものを私に与えた。今、ここであなたの髪を洗うのは私の本意ではない。私はエリートとして、あなたのような人生を送りたかった。全くくだらない。でも赦さないと自分が辛いから神を赦したのだ。」彼は志したものがありましたが途中で挫折したのです。そして楽にできる今の場所を選んだのです。人が神を赦すとはどういう行為なのでしょう。その様な事が起こりうるのでしょうか。「私の願いはこんなものではなかった。」彼はずっと過去に生きているのです。実は私たちの中にもこのような思いは潜んでいて、それは大きな影響をもたらします。本来その人に与えられようとしていた素晴らしい人生になかなか戻る事ができず、そうでない道に生きようとしてしまいます。なぜなのでしょう。

「一年に一回だけ天使がやってきて最初にその池に入った人が癒される」という言い伝えのあるベテスダの池のそばに38年間立つ事ができない病人がいました。ある日ついにその時が来ます。が、来たのは天使ではなくイエス様だったのです。イエス様は彼に聞きます。「あなたは一体どうなりたいのですか？」

ですが病人の彼はこの質問には答えません。彼の答えはこうでした。「私をあの池にいてくれる人が誰もいないのです。」もう一度イエス様が聞きます。「あなたは一体どうなりたいのですか？」そして彼は、やっと気づき癒されました。「もう罪をおかしてはならない。もっと悪くなってはいけないからだ。」私たちにとっての悪い事とは物理的にみてよくないことや、ある部分が欠落して誰かと比べて不足していることではなく、あなたの命が損なわれるという事です。それは肉体の命ではなく、あなたの霊の命が死に至る事の恐れです。彼の罪は一体何だったのでしょうか？それは彼が言った「誰も池に入れてくれなかった。」という言葉でした。彼の中にある、死んだ心が罪だったのです。それは立って歩いている人と自分を比較した痛みからでした。人は常に優越性を求めて生きています。本来の優越性とは何でしょうか？

立場、過去、自我を捨てる

（間違った優越性要求からの解放）

優越感とは自らが昨日よりももっと良くなったという自分が本来の自分の姿に近づいていくことに対するものなのです。ところが私たちは子どもの頃からテストでいい点を取る事や、人に負けては駄目だと言われて育ち、頑張って特別になろうとします。ではそれがうまくいかなかった時にどうするのでしょうか。本来、失敗した時にどうあるべきかわかっているのに目立つために安易な方法で全く真逆な特別になろうとします。まさに安直な優越性に浸ろうとします。本当は暖かく純粋な心を持っているはずなのに絶えず心にあるのは比較と人からの視線になってしまったのです。私たちにはそれぞれに与え

られた立場がありますがそれが間違った優越性によってできたものであるならば大変危険です。では、このような間違った優越性はどこからくるのでしょうか。それは過去です。私たちが過去、自我を持っている以上は神様が働きたくても働けないのです。安直な優越性を求めている時、私たちは子どものように間違った行動をとってしまうのです。相手に対して伝えたい寂しかった事、苦しかった事、腹が立った事も伝えられません。結果、全く逆の行動で伝えようとするのです。子どもがこけて泣いている時、私たちが立たせれば、その子は他者から与えられた優越性に浸り訴えた時に聞き入れられたという思いになりますが、自分で立ち上がる姿を褒めた時には、その子は自己の優越性に生きる事が出来るのです。神様も同じです。あなたはどうなりたいのかと聞いて待っているのです。もしも私たちがこの地にあって「立場、過去、自我」を捨てる訓練を受けているならばそれは受けなければいけないのです。

ヨハネの福音書17章 ～神様からの遺言書

私たちが「立場、過去、自我」を持ったままでは悪いものの餌食になっていきます。だからこそもう一度神様の元に帰っていかねばなりません。イエスは神でした。神であつたにも関わらずこのような（17章）祈りをされたのです。神は自分のあり方を捨てる事は出来ないと考えず自らを無にし、仕える者の姿をとり十字架に架かりました。私たちが喜んでいる事、私たちと一体になる事が願いなのです。

神様の愛の中に！！

私たちは神の愛の中にとどまらなければいけません。自らの外側を着飾り特別にしようとすれば、あなたの本質が失われます。神様の元に帰ると、あなたの本質が作られあなたそのものが個性的になるのです。あなたの過去や立場を捨ててあなたがあなたとして行動すれば実が残ります。神様は、ただただあなたを待って愛しています。

最後に

私たちは幼いころから一位になる事を願ってきました。競争が悪いのではなく個性を無にして強いるのです。一用の教育では必要なのかもしれません。ですが神様はそのような指導はしません。あなたにとって必要な愛を伝え、あなたを戻し、あなたがあなたでいる事を喜ぶたいのです。神様があなたを評価するのはどこですか？奉仕でしょうか、良い祈りでしょうか、隣人のフォローでしょうか？この地にあって社会的に評価されたら良いのでしょうか？そうではなく、あなたが造られた姿で行って実が残る事を評価したいのです。神の前にいなければそれは果たされません。安直な優越性の負の連鎖を止めなければいけません。それは、あなたから出来るはずです。あなたの神様はどこにいますでしょうか。み言葉は、あなたの近くにあり、あなたの口にあり、あなたの中にあります。

（要約者：西崎 真由美）

（3月5日）